

# 音楽科と他教科との協働について考える

—平成 28 年度「教科教育学研究方法論」を振り返って—

徳永 崇（音楽文化教育学講座）

## 要約

筆者は、平成 28 年度「教科教育学研究方法論」において、「音楽科の課題と展望」をテーマに講義を担当した。この講義は「美術科」との合同で実施され、近接分野としての共通の問題点を確認した他、受講生に芸術系とそれ以外の科目との協働の可能性について問う内容となった。その結果、改めて他専攻在籍者の音楽科に対する認識と、当事者のそれとの相克に気付かされることとなった。その「気付き」は、他教科との連携を模索する上での第一歩であると感じている。

## I 「音楽科」の課題

### 1. リアルな「音楽科」の現状

本授業では、中等教育における音楽科の様々な問題点について、他専攻の学生にも認知してもらい、学生間の討論の糸口にする狙いから、学部生に対する事前のアンケート調査を行った。その内容は下記の通りである。

対象：音楽文化系コース 1～3 年生 54 名（平成 28 年 4 月～5 月）

質問内容：質問 1 中学校から高校にかけて好きだった科目のうち上位 3 つを答えよ。

質問 2 質問 1 で「音楽」を挙げた人は、その理由を答えよ。

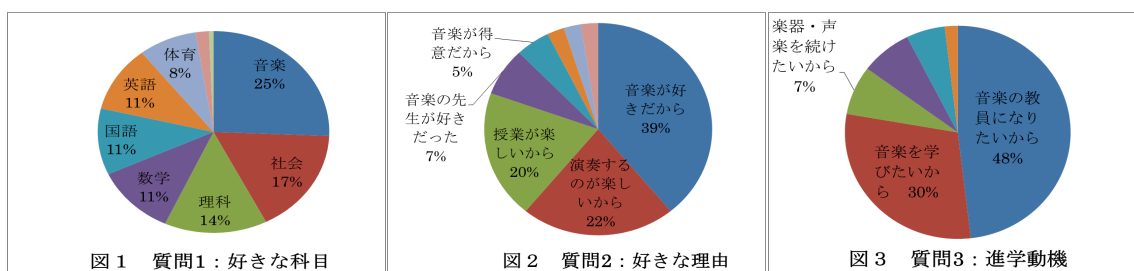
質問 3 音楽文化系コースに進学した動機は何か。

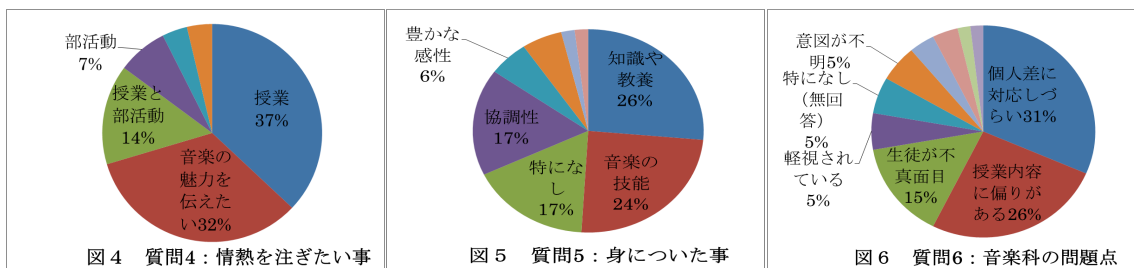
質問 4 もし音楽の教師になったら、どのような事に情熱を注ぎたいか。

質問 5 これまでの音楽の授業で、どのような学力が身についたか

質問 6 中学または高校の音楽の授業の問題点は何か。

上記の質問に対する回答の結果をまとめ、グラフにしたものを下記に記す。





まず、図1を見ると、音楽文化系コースに在籍する学生の多くは、当然音楽の授業が一番好きである、ということを示しているが、その割合は3割にも達していないことも分かった。続いて図2を見ると、音楽の授業が好きな理由としては、音楽そのものが好きであるからという理由が大半であった。図3を見ると、半数近くが音楽科の教員を志望していることが分かったが、同時に音楽に関する知見と技能を深めたいという学生も多かった。図4の結果は、教員になってから良い授業を行って、音楽の素晴らしさを伝えたいという学生の心意気が窺えた。なお、部活動を重要視している者が相当数いる点は、音楽科に顕著な傾向である。このように、音楽の授業の魅力、音楽自体のすばらしさを感じている学生が多い反面、実際に音楽科の授業で何を学んだのか、という図5に関しては、「特になし」が相当数存在することも分かった。また、音楽科の授業の問題点に関する図6を見ると、個人の技能の差や、教員の能力による授業内容の偏りの他、関心の薄い生徒の存在、科目として重要視されていない状況が顕著であることが分かった。これらを総合すると、音楽科の現状とは、「個人差の大きい生徒たちを相手に、先生の好みや得意分野に偏った内容で、生徒の興味関心も得られず、授業の統制もままならず、ちょっとした教養と技能が身につく程度の、イタイ授業」という側面が浮かび上がった。

## 2. 「音楽科」において養う力とは

上記のアンケート結果を見ると、もはや「音楽科」が授業として機能しておらず、不要であるかのような印象を受けかねない。しかし、それについて言及する前に、そもそも「音楽科」において養うべき力とは何なのかを確認し、それらが教育の現場でいかにして教授されているのかを検証する必要がある。

まず、中学校指導要領を見てみると、第2章において下記のように記載されている。

### 中学校指導要領 第2章 各教科 第5節 音楽

#### 第1 目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。

また、各学年の目標及び内容のうち、第1学年について見てみると、下記のように記載されている。

〔第1学年〕

1 目標

- (1)音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を養い、音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる。
- (2)音楽表現の豊かさや美しさを感じ取り、基礎的な表現の技能を身に付け、創造的に表現する能力を育てる。
- (3)多様な音楽に興味・関心をもち、幅広く鑑賞する能力を育てる。

これを見ると、音楽を愛好する心と感性を磨き、音楽活動をする上で基礎的な能力を伸ばし、情操を豊かにするとある。そのために、中学校1年では、音楽に「関心」を持たせ、基礎的な技能・能力を身につけさせ、幅広い音楽を聴く機会を設けるべき、と定めているのである。しかし、先のアンケート結果は、真逆の結果になっていた。

これに関連して、中学校1年生の音楽の基礎能力を測定した先行研究がある。吉富ほか(2008)は、広大附属中学校4校の1年生を対象に、簡単なフレーズの「聴唱」(音を聞き、歌って再生)と「視唱」(楽譜を見て歌う)の能力を下記の方法で測定した。

- ①譜例1を「アアア唱法」で聴唄
- ②譜例1を階名聴唄
- ③譜例2を階名視唱
- ④譜例3を階名視唱

楽譜1 (アアア唱法) (階名唱法)



楽譜2 (階名視唱1)



楽譜3 (階名視唱2)



上記の調査における正答率は下記の通りとなった。

- ①「アアア唱法」による聴唄：67%
- ②階名による聴唄：46%
- ③階名視唱1 (階名を付記せず)：35%
- ④階名視唱2 (階名を付記)：52%

この結果を見ると、「アアア唱法」による聴唄、即ち音を耳で聞き再生することはある程度できるものの、階名によって歌う、あるいは簡単な楽譜を見て歌う能力が著しく低いことが分かる。これら学習によってのみ獲得される能力が低いことから、中学校以前の小学校における音楽科教育に問題があると、吉富らは指摘している。

「楽譜を読む」能力は、例えば国語科における識字、算数における記号の理解に匹敵する重要かつ基本的なものであり、音楽活動を行う上で必須である。この能力が著しく低いということは、かなり危惧すべきことである。学習すべき漢字の35%しか理解できない生徒が存在したとしたら、相当に問題であるが、そのような状況が音楽科においては現実になっているのである。

それでは、これら基礎的な能力は小学校において教授する必要がないのであろうか。そこで、小学校学習指導要領を参照してみた。下記は小学校5・6年の内容の抜粋である。

## 小学校学習指導要領 第2章 各教科 第6節 音楽

〔第5学年及び第6学年〕

### 第2 内容

(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を指導する

ア 範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。

(2) 器楽の活動を通して、次の事項を指導する。

ア 範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。

これを見ると、ハ長調・イ短調といった調号の無い簡易な調の楽譜を理解することが明記されている。小学校における音楽の授業において、基礎的な能力を身に着けさせることが定められているにもかかわらず、十分に達成されていない実態が明らかとなったのである。小学校の児童に、「ドレミ…」や楽譜の読み方を教えることが、なぜ十分に実施されないのであろうか。音楽科の存続を問う前に、まだ改善すべき余地が多く残っているのである。

## II 他教科との協働

### 1. 「音楽科」の課題に対する学生の反応

Iの内容を、「教科教育学研究方法論」において報告したところ、その反応は様々であった。以下は授業内でのコメント、及び授業後のレポートに依拠しながら述べる。

まず、音楽科において音楽の基礎的な技能教授が十分になされていない点に対して、多くの驚きの声が上がった。また、教員の志向や専門性によって、教える内容に大きな偏りが生じる点について見ると、他教科でも若干そのような事例が見られるものの、音楽科における顕著な例に対しては、やはり懸念の声が挙がった。しかし、音楽科の担う情操教育という側面については肯定的な意見が多く、そのような視点から、他教科との連携の可能性を指摘する意見も見られた。他教科の学生の中には、上記のような音楽科の課題について考えることで、自分たちの専攻する教科ならではの問題点についても思いを巡らせるきっかけとなった様子であった。学生間のディスカッションにおいては、教科の連携に関する事項は勿論のこと、そのような各教科特有の問題について情報を共有し合っている様子も見受けられた。

## 2. 芸術系科目と他教科の協働の可能性

以上の情報提供の後、美術科の担当教員によって「美術科の課題と展望」について報告がなされた。その上で、これら芸術系の科目とその他の科目の協働について考えることを意図し、「連携」「統合」といったキーワードを用いて、その可能性について学生達と討議した。その反応も様々であったが、いくつかの興味深いコメントについて取り上げる。

まず、教科の統合・融合については、現状を鑑みると困難という意見が多かった。その理由としては、そもそも各教科で解決すべき問題が山積しており、統合・融合を考える前にそれら进行处理すべき、というものであった。また、各教科の枠はある程度現状を維持しつつ、鋼材や活動の中で連携すべき、という意見も多く見られた。しかし、連携そのものに対してネガティブな意見はなく、個々の教科の枠内に閉じこもっては分からない関連性を探ることの必要性については、概ね共通した認識であった。

## Ⅲ まとめ

今回の授業を通して、芸術系の教科の抱える問題点について、ある程度の理解は深まったと感じている。他教科との連携の重要性については、学生も強く認識している様子であったが、それらを実現する上での方法について未知の部分が多く、特に教科の融合や統合にまで話が及ぶと、戸惑いを見せていた。現時点では教材や活動における共同作業が現実的であるという意見も挙げた。また、連携について考えを深めるにつれ、むしろ各教科の問題点が浮き彫りになり、まずその問題を片づけることが先決と考える学生も多く見られた。

以上のことから、芸術系教科と他教科の連携の具体までは検討できなかったが、それを前進させるうえでの基盤の確認がある程度成されたという点で、有益であったといえよう。なお今回は、各教科 20 分という限られた時間での発表となってしまったため、其々の課題と展望についての十分な理解を得るまでには至らなかったと感じている。今後は発表内容の精査と共に、時間配分についても検討できれば幸いである。

## 参考文献

- 吉富功修 三村真弓編 (2010)『第2版 小学校音楽科教育法 学力の構築をめざして』  
ふくろう出版
- 吉富功修・三村真弓・光田龍太郎、藤井恵子、桑田一也、松前良昌、増井知世子、原寛暁  
(2008)「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1)  
—中学校入学時の音楽学力の実態を中心として—」『広島大学 学部・附属学校共同研究  
機構研究紀要』第36号, pp.155-163